

# 2 動物園の歴史と役割



村田 浩一  
MURATA Koichi

よこはま動物園ズーラシア園長

人々にとって身近な動物園は、これまでどのような歴史を辿ってきたのだろうか。様々な形態を経て変化してきた世界の動物園の歴史を概説するとともに、その社会的役割を紐解きながら動物園が存在する意味を知る。

## 動物園の歴史の変遷

動物園の定義は意外と定かではない。概ね一般公開が原則になっているが、歴史的には王侯貴族の私的な動物飼育施設も動物園もしくはメナジェリー(動物観覧場)と呼称されることもある。それを考慮に入ると、野生動物の飼育施設の歴史は、大きく次の4つのステージに分類できる。①古代エジプトやギリシャそして中国王朝の時代、②ヨーロッパの貴族社会の時代、③近代以降、そして④現在から未来である(図1)。これらについて、以下順を追って概説したい。

### 古代エジプトやギリシャそして中国王朝の時代

今から約5,000年前の古代エジプトでは野生動物を家畜として飼育していた歴史がある。驚いたことに、狩猟や搾乳のためにアフリカに生息するチーターやエランドを家畜化していたこと分かる壁画が残されている。さらに、ハヤブサやマントヒヒやカバなどの野生動物が神格化され崇められていたようだ(写真1)。約3,000年前の中国では、周の文王が自身の庭に動物園を持って

いた。それは「知識の園」と呼ばれ、広さは70里(約35km)四方あったと言われるが真偽のほどは疑問である。

日本の縄文時代に当たる4,600~2,300年前の古代ギリシャで知られているのはアレキサンダー大王のゾウの飼育である。彼はインド遠征時にアジアゾウと象使いを連れ帰り戦争のために用いた。一方、アリストテレスが『動物誌』で知られる野生動物学



図1 動物園の歴史と変遷を示した図(『動物園学』(文永堂出版、2011年)掲載の図を改変)



写真1 古代エジプトでは野生動物が神聖視されると共に飼育管理技術も発達していた(ルーブル美術館の展示品)

の研究を行っていたのは特筆すべきだ。

日本の弥生時代に当たる約2,700年前の古代ローマでは、皇帝がコロッセウムで動物格闘技を市民に見せて自身への評価を高めようとしていた。動物園関係者として興味深いのは、アリーナの地下に飼育施設があり格闘させる動物を人力のエレベーターで地上へ運んでいたという技術である。

### ヨーロッパの貴族社会の時代

日本の古墳時代から室町時代に当たる西暦400~1400年頃には、西欧の王侯貴族の間で動物収集の趣味が広がった。フランク王国のカール大帝は、領地の3か所でアフリカゾウ、ライオン、ホッキョクグマ、ヤマアラシなどを飼育していた記録が残っている。イングランド王のヘンリー3世は、ロンドン塔内でアフリカゾウやヒョウなどを飼育していたし、アジアではモンゴル帝国の第5代皇帝フビライ・ハーンが、狩猟のためにチーターやハヤブサを飼育していた。フビライは世界初の狩猟制限区域や公的狩猟期間などを設けて野生動物保護政策を行っていたと言われている。その様子を西欧で紹介したのが『東方見聞録』の著者であるマルコ・ポーロだ。

15~19世紀に西欧で発展した航海術に伴い植民地政策も拡大され、世界中から珍奇動物の採集も広く行われるようになった。それは、支配者の権威を示すためであり、貴族たちの趣味によるものであった。しかし一方で、ルネッサンス期にはレオナルド・ダ・ヴィンチが解剖学的な研究を行い、市民の間でも自然に対する関心すなわち博物学への興味が高まり、世界中の珍しい自然物を集めたヴンダーカ

マーとか驚異の部屋と呼ばれる自宅での展示施設が流行した。実はこれが博物館の元となっている。

1752年、オーストリアのフランツ1世による世界初の動物園とも言われているシェーンブルン宮殿内にメナジェリーが誕生する。彼の妻である MARIA・テレジアの動物好きが影響していたようだ。この施設では、1883年に絶滅したシマウマの仲間であるクアツガが飼育されていた。ここが世界初の動物園と呼ばれるのは一般公開されていた事実による。フランスでは、国王ルイ14世がベルサイユ宮殿内にメナジェリーを建造し、インドサイ、ハチドリ、ゴクラクチョウなどを飼育した。彼に関しては、さまざまな悪評もあるが、学問に関しては先進的な取り組みを行っている。たとえば、現在、世界中にある学会議の基礎を作った。このアカデミーには、当時、国内有数の学者が集められていた。パリのメナジェリーの園長は、ジョフロア・サンチレールやジョルジュ・キュビエやラマルクなど当時ヨーロッパ全土で知られた学者であった。

話は少し逸れるが、哲学者で知られているドイツのヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは動物形態学にも精通しており、頭部の顎間骨(がっかん)を発見した人物でもある。そのゲーテが「パリが大変なことになっている!」と叫んだ時、周囲の人たちは革命のことかと思ったのだが、実はサンチレールとキュビエの間で行われた学問上の大論争であったという逸話がある。

ルイ14世の栄華がフランス革命によって崩壊した後、メナジェリーは国立自然史博物館附属植物園内の動物園に引き継がれた(写真2)。



写真2 国立自然史博物館に付属した動物園(メナジェリー)。日本最初の動物園モデルでもある



## 近代以降

1828年には、現在の動物園の祖とも言える近代動物園が大英帝国に誕生した。動物学協会の運営によるロンドン動物園である。当初ここはGardens and Menagerie of the Zoological Society of Londonという長たらしい名前であったが、当時のミュージックホール歌手のアルフレッド・ヴァンスの歌『Walking in the Zoo』の中で略称されたZOOが広がり定着した。もし彼がこの言葉を商標登録していたら、世界中の動物園はZOOを名乗れなかったであろう。当時のイギリス、つまり大英帝国はフランスと競争関係にあり、動物園に関してもパリにあるメナジェリーを超えるものを画策したと思われる。ロンドン動物園以降、欧米の多くの動物園は動物学協会が運営する体制を踏襲したが、今は日本を含め自治体や企業や個人などによる多様な経営スタイルがある。

日本では、1882年にパリにある国立自然史博物館のメナジェリーを模範として上野動物園が開設された。メナジェリーは、動物学のみならず植物学や鉱物学、比較解剖学の博物館を擁した総合博物館公園の一施設であった。おそらく先人たちは、当時世界を席卷し華やかだったヨーロッパの博物学文化を真似ることで、シルクロードの末端に位置する小さな

島国の存在を世界に示したかったのであろう。残念ながら、殖産興業や富国強兵といった世界に追いつけ追い越せの風潮の中で、当初の総合博物館構想は達成できず、単に展示施設の一部だけを模したのになってしまった。博物学に関わる文化構築を追求せず主に慰安を目的とする傾向は、戦後の荒廃から抜け出すために各自治体に林立した公立動物園に受け継がれ、それは現在に至っても大きく影響を与えている。

## 動物園の役割の進化～現在から未来～

現代における動物園の4つの役割として国内外で知られているのは、①レクリエーション(慰安)、②調査研究(学術)、③環境教育、④希少種の保全である。これら以外にも地域振興や都市公園法による広域防災拠点などの役割もある。

### レクリエーション

レクリエーションについては、市民が楽しく利用し憩える建築デザインが深く関わっている。動物園では海外の模倣が未だに主体となっており、短期間に関係者が海外視察して外見だけを参考にした展示施設が多い。インターネットが普及した現在、先

進国の情報を丸ごと受け入れるだけで、あまり頭を使って考えることがなくなったように感じられる。建築業界でも同様ではないだろうか？日本固有の歴史的な優れた技術や知識を活かして、世界に誇れるオリジナリティーを創出するべきではないかと日々考えている。

### 調査研究

調査研究については、近世の王侯貴族は、純粋な野生動物に対する興味から飼育や繁殖を試み、その対象はアフリカのみならず南米にも及んでいた。それは、日本で言うところの殿様生物学に似ている。江戸時代には薩摩藩が城内に動植物園のような施設を持っていたとされる。藩主島津斉彬の博物学趣味であるが、野生動物に関するかなり高度な情報と知識を収集していたようだ。

パリで開催された万国博覧会には、幕府側とは別に展示施設を開き、薩摩藩も独自に参加していた。幕府は、蕃書調所の下級技官であった田中芳男を展示担当として、昆虫標本などを出展した。田中は著名な本草学者の伊藤圭介(日本初の理学博士)を師とした人物である。日本の動物園の始まりは、湯島聖堂に設けられた文部省博物館(現在の東京国立博物館)であり、そこには天産物としてヒゲマが展示されていた。その後、内山下町(現千代田区内幸町)に移転された動物の陳列館では、ヤマネコ、キツネ、タヌキ、オットセイ、イノシシ、シカ、モモンガ、サンショウウオなどが展示されていた。

初期には、動物園が学問基盤とした博物館の一部であるという思考があった。つまり、動物園が持つ役割として学術が重要視されていたのは確かだ。

### 環境教育・希少種の保全

環境教育と希少種保全の役割については、世界中の動物を統括するWAZA(世界動物園水族館協会)が、数年毎に活動の戦略を立て冊子として発行している(写真3)。これまでは、主に希少種保全を中心としていたが、欧米先進国で急速に広がった動物愛護やアニマルライツ(動物の権利)による動物園批判や逆風に真摯に対峙するため、動物福祉(アニマルウェルフェア)にも注力するようになっていく。そして現在は、気候危機や生物多様性消失そしてマイクロプラスチックなどの問題に対処するため、



写真4 横浜市の3動物園では正門前に役割を解説する看板が設置されている

地球環境保全を目指した活動へとシフトチェンジしている。そこには、私たちの惑星(地球)を守るために生物多様性保全とその情報発信(環境教育)を先進的に行う社会変革のリーダーになるという強い意志が働いている。私が勤務する横浜市動物園でも、「動物園から社会を変える!」を合言葉として、3か所ある各動物園の正門前に新たな役割と目的を記した看板を設置した(写真4)。これからの動物園は、動物を見て感じ・知り・学び・守るために、地球環境を視野に入れた役割を担って行かなければならないだろう。



写真3 2019年にWAZAが新たな戦略を示すために出版した2つの冊子『私たちの惑星を守る』と『保全のための社会変革』